

フィリピン社会の現在—鶴見良行を基点として—

日時：2015年7月3日（金）18：30～21：00

会場：立教大学池袋キャンパス 8101 教室

協力：「鶴見良行文庫」委員会

講師： **Randolf S. David**（フィリピン大学名誉教授、社会学）

はじめに

まず最初に、この特別な日、私の友人であり、ジャーナリスト、研究者、そして活動家であった鶴見良行の、ノートその他の個人文書や蔵書コレクション、一言で言えば彼のアーカイブを所蔵する特別な空間が正式に開かれる日に、みなさんの前でお話する機会をいただいたことにお礼を申し上げたいと思います。とくに立教大学共生社会研究センター長である高木先生に、私を講演者としてお招きくださったこと、そして講演会のタイトル「フィリピン社会の現在—鶴見良行を基点として」をご提案くださったことに、感謝の意を表します。鶴見の魂が今日、どこにいるにせよ、彼は立教大学が示してくれた敬意を喜び、微笑んでいることでしょう。

なぜ、鶴見は私たちにとって重要なのでしょうか。その答えはとても単純です。鶴見はフィリピンと日本の学問にとって重要な時期に、決定的な役割を果たしたからです。彼は多くの若い日本人研究者、その中には学生もふつうの市民もいたのですが、そうした若者を鍛え、刺激して、フィリピンと日本の関係を見つめ直すよう励ましました。そして日本国内にひとつの知的なコミュニティを築いたのです。そこにたんに反体制というだけではない、深く自らを見つめ直す視線や、学び、真に独創的な研究をしようという意欲に満ちた人々を集め、さらにアジア各国の研究者も巻き込んだのです。鶴見の研究テーマと方法論の根底には、あからさまには言葉にされませんが、オルタナティブな開発の哲学があります。それは、国家や民間企業の利益ではなく、ふつうの人々の生活とコミュニティを中心に据えるものでした。

鶴見が目指したこと

ガンとの長い闘いのすえ、1994年に68歳で亡くなったとき、彼は戦後日本の東南アジア諸国との関係について綿密に調査し、文章化するという仕事に、彼の職業生活の20年以上を費やしていました。このトピック自体は、新しいものではありません。そして、多くの点で、鶴見もまた、アジア地域研究を専門としてキャリアを築いた研究者たちの一人にすぎません。しかし、この広範な研究分野に対する鶴見のアプローチはユニークなものでした。というのも、それは欧米の大学におけるいわゆる「地域研究」を限界づけている様々な前提に縛られていなかったからです。鶴見の学問へのアプローチは、草の根志向でした。つまり、ふつうの人々をたんなる情報提供者として扱うのではなく、人間を解放するような知識の創造におけるパートナーとみなしていたのです。鶴見は、人々の具体的な日常生活のレベルで、日本と東南アジアの関係が示す様々な局面を理解しようとしていました。彼が目指したのは、あ

る特定の地理的な空間ではなく、グローバルな諸勢力によって引き起こされる機会や危険に対して人々が反応する、そうした反応が交わる様々な点でした。鶴見は抽象的な社会システムや社会プロセスについて理論をもてあそぶことには興味がなかった。むしろ、繁栄し進んだ現代日本のふつうの人々の暮らししかたが、フィリピンやインドネシアなど、開発途上国に生きる何百万もの貧しい労働者や農民、そして彼らの共同体の労働と犠牲により可能となっているかを知りたくてしかたがなかった。鶴見はそれらがつながる複数の点を探していた。そして取引される産品、奨励される投資、そして日本からアジア地域に流れこむ政府開発援助（ODA）に、そうした交点を見出したのです。フィリピンのバナナやマグロ、インドネシアのエビやナマコ、そして日本からは、ミンダナオに公害とともに輸出された川崎製鉄の焼結処理工場、そしていわゆる ODA—こうしたものすべてが、鶴見にとって、第二次世界大戦期の日本による軍事侵略の痛ましい思い出からようやく立ち直ろうとしていたアジア地域における、日本の新しい種類のプレゼンスを示す重要な指標となりました。

フィリピンの歴史家である故・レナト・コンスタンティーノは、戦後日本のこうしたプレゼンスをずばり「日本による第二の侵略」と呼びました。1978年10月、鶴見がプログラム・オフィサーとして勤務していた国際文化会館で講演したコンスタンティーノは、懸念をもって語りました。「日本の商品が地元市場を席巻している。日本のグローバル企業が群れをなしてやってきて、実入りの多い事業に参入している。日本人観光客が私たちの（フィリピンの）ホテルを満室にし、観光地にあふれかえっている。日本のマンガが私たちの（フィリピン人の）子どもたちの心をとらえ、日本の戦争技術を崇拜するように仕向けている」と。コンスタンティーノは、フィリピン人たちに「日本の経済進出が、フィリピン人だけでなくアジアの隣人たちにとってもどれほど危険なものか気づいて」ほしかったのです。

鶴見はコンスタンティーノの批判的なエッセイの数々を日本語に翻訳しました。日本とフィリピンの不平等な関係は、日本人にも理解されるべきであると確信していたからです。そうした関係はあまりに複雑なので、ふつうの日本人は気づいてもいなかったのではないのでしょうか。あるいは、気づいていたとしても、個人としての彼ら一人一人とは関係のないことだと思ったかもしれません。鶴見の研究は、とくに若い日本人に、彼らが消費するもの—ほんの数例を挙げるとしたら、バナナや、マグロ、エビやナマコなど—の多くが近隣諸国から輸入されていることを、そして海の向こうではふつうの人々が搾取され、生活を破壊され、収奪された状況でそうしたものが生産され、収穫されていることを示そうとしたのでした。

鶴見はこのことを日本人に気づいてほしい、そしてそのことで悩んでほしいと思っていた。彼は日本の読者に、「歩きながら考え」、消費習慣を見直し、それが政治・経済的な依存という枠組のなかで、アジアの隣国に生きる人々の暮らしにどうつながっているかを理解するよう促しました。この点で、鶴見は市民社会における運動に新しい次元を切り開いたのです。

こうした社会的現実を表すために、鶴見が「開発侵略 development aggression」という言葉を使ったかどうか、私は思い出せません。しかし70年代、80年代には、第三世界の多くの書き手に、この言葉が使われていました。「開発侵略」という概念は、地球規模で進行する侵略的な開発により引き起こされている土地収奪、社会構造の劇的な変化、自然環境の広範な破壊に、人々の注意を向けさせるためのものでした。

鶴見は平時にも、ある種の侵略が起こりうることを十分承知していました。そしてそれこそが、多くの面において、戦争そのものよりも人々の生活に対し、目立たないけれども深刻な影響を及ぼすものであることに気づいてもいました。彼の著作がいまも重要で、力を保ち

続けているのは、日本人がその日常生活の多くの局面において、アジアの隣人たちの抑圧と搾取に加担しているということ、より多くの日本人に意識させるものだからです。

バナナ、プランテーション、ミンダナオ

バナナの研究のとき、私は鶴見とミンダナオのバナナ・プランテーション内部でフィールドワークを共にしたのですが、そのとき鶴見はフィリピンの零細農民が、日本にバナナを供給する多国籍企業の契約農家となるために、米その他の農産物からバナナへ、栽培対象を切り替えるのを見ました。そして彼は、バナナ・プランテーションのような大規模集中単一栽培がもたらす破壊的な、数々の影響を暴き出したのです。

ミンダナオで現在起きていることを理解するために、鶴見の書いたものや、彼がフィリピンでのフィールドワークにあたって収集したパンフレットや文書類を読み返すのはとても有効なのではないかと思います。鶴見が調査した小規模なバナナ農家は、ミンダナオに最初のキリスト教移住者としてやってきた人たちの子孫だったということ、まず理解しておかなければなりません。彼らは、フィリピン政府によってミンダナオに連れてこられ、ミンダナオとその先住民族をフィリピン社会の主流に同化させる過程を加速するために、意図的に土地を与えられたのです。宗教ではなく土地が、ミンダナオ紛争の根底にあります。バナナ農園となった土地は全て、ミンダナオ先住民族であるルマド (Lumad) の人々が先祖代々伝えてきた土地の一部でした。フィールドワークのなかで私たちは、土地を失ったルマドの人々に出会いました。彼らは先祖のものであった土地で、バナナやパイナップルのプランテーションに労働者として雇われていたのです。

これらのプランテーションに代表されるような開発は、それが展開する町以外の地域にはほとんど経済的影響がなく、地域内の不平等を先鋭化する役割しか果たしません。ジェネラル・サントスやダバオのような都市が商業の中心地として栄える一方で、イスラム教徒の住む地方の町々はより周縁化され、国家開発の回路から除外されていきます。ミンダナオは「約束の土地」と呼ばれていました。天然資源に恵まれているからです。しかしミンダナオはもはやイスラム教徒や先住民族にとって希望をもたらす土地ではありません。自分たちの森が伐採されるのを、人々は目にしました。何世紀もの間ルマドのふるさとであった、人里離れた山岳地帯で、鉱業会社が採掘権を求めて先陣争いをするのを、人々は目にしました。強制退去や、土地をめぐる紛争は、日常的な出来事になりました。共産主義の新人民軍 (New People's Army) にとって、複雑にかみ合ったミンダナオの紛争は、民主化闘争を展開するための最適な場となりました。

私たちがバナナを研究していた 80 年代初期に、ダバオは多様な武装集団が出入りする複雑な戦場となりました。大企業家や政治家の私兵たち、フィリピン軍が指揮する民兵組織、党派的な宗教団体が組織するキリスト教民兵組織、モロの身代金目的誘拐集団や、共産主義の暗殺集団などです。この時期、ヌル・ミスアリのようなモロの指導者たちは、分離独立を訴えることで、モロのコミュニティを統合しようとしていました。モロ民族解放戦線 (Moro National Liberation Front : MNLF) の結成は、彼らの闘争にとって重要な転換点でした。MNLF はリビアのムアンマル・カダフィーの関心を引き付け、カダフィーが、ミスアリを財政的に援助し、影響力のあるイスラム諸国会議機構 (Organization of the Islamic Conference) との橋渡しをしたのです。

こうした混沌とした状況が落ち着き始めたのは、1986 年にコリー・アキノが大統領に就任し、新政府がミンダナオとコルディリェラの人々に対してなされた歴史的・社会的不正義

を認める規定が、憲法に盛り込まれてからのことです。それに続く和平交渉により、一時的な休戦がもたらされました。しかし打ち立てられた自治は、期待はずれのものでした。コリー以降のどの大統領も、動き出したモロ勢力との合意を独自に取りつけなければなりません。しかしモロは、新しい政権と合意を交わすたびに分裂していきました。繰り返された分裂はまた、ミンダナオのイスラム教徒を歴史的に分かってきた民族の境界線に沿ったものでもありました。

コリーの、そしてフィデル・ラモスの時代には、タウスグを本拠とし、ミスアリをリーダーとするモロ民族解放戦線（MNLF）が力をつけてきていました。エストラーダ、アロヨ、そしてベニグノ・アキノ III の時代には、ミンダナオを本拠とし、故ハシム・サラマトが率いるモロ・イスラム解放戦線が支配的でした。現在、フィリピン社会は 17 年にわたる和平プロセスの終わりを迎えようとしています。モロ・イスラム解放戦線（Moro Islamic Liberation Front: MILF）、アキノ政権のどちらも、誰もが参加できるような開発がなければ、ミンダナオに長期的な平和は訪れないことを理解しています。しかしそうした開発はまた、平和がなければ維持できません。現在フィリピン国会で議論されているバンサモロ基本法（The Bangsamoro Basic Law）は、バンサモロの自治という新しい実験を成功させることで、現存する停戦状態を制度化することを目指すものと言えるでしょう。もちろん、これが成功するという保証も、最終的な分離独立のためのプラットフォームとしてこれが機能しないという保証もありません。

私の考えでは、ミンダナオ問題のほんとうの起源は、この地域に持続する不均等発展です。こうした発展様式は、少数の重要な地域や重要な一族に富を集中させ、民衆の大多数と周縁部を貧困に追いやるものです。世界のような地域でイスラム過激派が勢力を伸ばす今、私たちは、基本的には経済における公平と開発を求める動きを支えるために、宗教的アイデンティティが動員されるさまを目の当たりにしてきました。経済活動の周縁で長年にわたり不満が蓄積されるとどうなるか。鶴見が生きていたら、その古典的事例を求めて、バシラン、スールーやタウィ・タウィの中間地域へ意気揚々と出かけていくだろう。その姿が目には浮かぶような気がします。

ミンダナオで鶴見の関心を最初にとらえたのは、バナナ・プランテーションではありませんでした。それはマグロだったのです。彼は、ミンダナオ南部、ジェネラル・サントス市の漁港で、水揚げ業者がむき出しの肩に背負って運ぶキハダマグロの写真を数えきれないほどとっていました。スールー海からあらゆる大きさのキハダマグロが獲られるのを見て、鶴見は、いったい自然はあと何年、こうした天然水産資源の絶え間ない取り尽くしに堪えることができるものか？と怪しんでいたようです。彼はここでもまた、日本の食卓に寿司や刺身を乗せるためだけに生み出される膨大な無駄に気づかざるを得ませんでした。「日本人が捨てるものは、フィリピン人がちゃんと食べ物にしているよ」と私は彼に言ったものです。彼をジェネラル・サントス漁港の道端の屋台に連れて行くこともありました。労働者階級が食事をするひなびた屋台で、日本の消費者がめったに目にすることものないようなマグロの部位を、私たちは食べました。この巨大な魚の尾や頭、魚卵、そして内臓です。こうした部位は、網焼きにされ、なじみのメニューとしてフィリピン人の胃に収まるのです。多くの点で、これこそが私たちフィリピン人の暮らしの物語なのでしょう。私たちは見栄えのよいバナナやマグロはすべて海外に送り、地元ではハネられた果物や魚の内臓を消費しているのです。

そして、人々も

その後フィリピンは、バナナやマグロだけではなくフィリピン人「エンターテイナー」を、日本の巨大な娯楽産業へと送り出すようになりました。今日、世界の百を超える国で一千万

人を超えるフィリピン人が働き、故郷に毎月 20 億ドル以上を仕送りしています。これこそが、私たちの消費経済を維持しているものなのです。

鶴見はこの現象の始まりを目撃していました。もしもっと長生きしていたら、この現象について、そしてこれがフィリピンと日本に対して持つ多様な意味について書いていたかもしれません。皮肉なことに、私が 1991 年に日本に来たのはこの現象を追ってでした。鶴見が正教授として地位を得ていた京都の龍谷大学に、客員研究員として招かれたのです。鶴見の親友である中村尚司先生のご協力により、私は京都と八幡市で 2 か月にわたってインタビューを実施しました。それを通して、日本で生きるフィリピン人労働者の生活状況を理解し、彼らが日本社会の厳格なありようによってどう適応したのかを知ろうとしたのです。

滞在期間中、私は何度か鶴見に会いました。彼と、夫人の千代子さんは、京都に移り住むことをすでに決めていました。ガンの手術をしたばかりで、まだ回復の途上にある様子でした。それでも、彼がはじめて日本に根付かせたような研究と基本的には地続きの研究を私がしていると知って、非常に喜んでくれました。私が龍谷大学に招かれたのも、鶴見のはからいがあるのではないかと、私は推測しています。龍谷大学は仏教系の大学ですが、すぐれた研究者・活動家であり、年齢的にも若いとはいえない鶴見と中村にとっての学問的聖域となっていました。鶴見が亡くなってからは、日本に来る理由も次第に少なくなりました。彼とともに、日本の研究者であり活動家である人々の一世代全体が去ってしまったように思えたからです。しかし、彼が亡くなってからも、彼の仲間とは連絡を取るようになってきました。例えば鶴見のフィールドワークによく同行していた藤林泰さんや、村井吉敬さん—村井さんもがんで亡くなりましたが—、そしてアジア太平洋資料センターの仲間だった武藤一羊さんなどです。また、私が教鞭をとるフィリピン大学でも、「鶴見先生の弟子」であることを誇りとする若い研究者を継続的に受け入れてきました。そして鶴見がマニラを訪れる際にいつも同行していた若い友人たち、たとえば津田守さんや寺田勇文さんとも、交流を続けています。

鶴見が独特の研究手法で刺激を与えた人たちの多くが、それぞれに教授職を得て、鶴見良行から拭い去れぬ知的影響を受けたという明らかな痕跡がそこそこに見られるような著作を出版されていることを、とてもうれしく思います。鶴見のもとでのフィールドワークの経験が実り多いものであったからこそ、彼らは安楽椅子の専門家による平板な学問に支配された研究環境において、かくも容易に際立った業績を上げることができたのでしょう。

鶴見との出会い

研究に対する鶴見のアプローチはつねに経験的かつフィールド重視であり、質問用紙や構造化インタビューに頼るものではありませんでした。彼の文体は、文化人類学者のクリフォード・ギアツが「厚い記述」と呼んだものと非常によく似ています。フィールドで得たデータを、それを引き出したコンテキストを誠実に保存するように記述する、という点においてです。鶴見は膨大なメモを取りました。ありとあらゆるサイズのノートに、きちんと整えて書いたのです。そこに彼はフィールドで観察したことや、出会った人々と分かち合った物語を記録しました。愛煙家で、のんべえでもあった人にしては、彼の書き文字はしっかりした、美しいものでした。フィールドで収集した素材の解釈は、そのとき調査対象としている場所、人々、経済や社会のセクターに関する広範な読書に支えられて、より深いものとなりました。鶴見は自分の仕事に完全に没頭していて、しかも一つところにとどまることのできない研究者の典型だったとも言えるでしょう。彼は見知らぬ人に会い、えんえんと会話することを心から楽しんでいました。鶴見は決して、そうした人々をたんなる情報提供者としては扱いませんでした。

70年代初頭、私を鶴見に引き合わせてくれたのは、当時フィリピン大学で私の学生だった津田守さん、愛称「リコ」でした。ある日本のジャーナリストが、私の義父である作家のレナト・コンスタンティーノに会いたがっているとリコが言うのです。鶴見のことをコンスタンティーノに伝えたとき、私は鶴見が日本でベトナム反戦運動にかかわる市民の連合体であるベ平連の主要人物であることにも、慎重に触れておきました。

フィリピンでは、戒厳令が敷かれる直前の時期にあたります。たくさん海外ジャーナリストが、ニュースを求めて国内をうろついていました。でも鶴見は、そうした落下傘ジャーナリスト、つまり問題を抱えた国に飛んで来て、電話でインタビューをこなし、記事を書いたら数日で本社のある国へ帰って行く、そういうジャーナリストの一人には見えませんでした。いつも色あせたジーンズをはいた鶴見は、ジャーナリストというよりは、一匹狼の文化人類学者に見えたのです。鶴見自身は、私が初めて彼にあつたときから、「ジャーナリスト」としてのアイデンティティを意図的に自らに与えていたようです。実際、彼は大学に所属する研究者に対しては批判的なようでした。あとになって初めて、日本では「ジャーナリスト」という言葉が、ある人が実際に何をしているかではなく、むしろ、鶴見のような人を仲間と認めない「学者」たちの排他性についてこそ、多くを語っているということに私は気づきました。

コンスタンティーノのように自立した思想家・作家と一緒にいるとき、鶴見はたいへんくつろいだ様子でした。もしジャーナリストになっていなかったら、鶴見はアジアの多くの友人と同じく、書店を営んでいたのではないかと思います。彼がマニラに来はじめてかなり早い時期に出会った友人の一人に、小説家で批評家のフランシスコ・シオニル・ホセがいますが、彼は *Solidaridad* 書店のオーナーでした。シンガポールでは、鶴見はよく長年の友であるウィリアム・リムの家を訪ねたものです。リムは建築家・都市計画家ですが、東南アジア専門の *Select* 書店の経営者でもありました。タイでは、仏教徒で社会主義者の知識人、スラック・シヴァラクサと変わらぬ友情を育んでいましたが、スラックの妻もまた、書店主でした。インドネシアでは、国連大学の初代学長となったスジャトモコ、そしてイスラム教徒の学者で、スハルト後のインドネシア大統領となったワヒド・アブドゥラフマンと強い友情で結ばれていました。こうした息の長い交友関係が、東南アジア研究グループの結成につながったのであり、鶴見はその創設メンバーの一人でした。私はこのグループのメンバーとしては第2世代になります。

鶴見は何よりフィールドワーカーであり、調査によって書く人でした。フィリピンに関する最初の記事は、バターンのマリベレス輸出加工区に関するものでした。マルコスがフィリピン全土に戒厳令を敷いた直後、マルコスの命令で着手された工業団地です。輸出加工区というアイディアは韓国から借りてきたものですが、輸出志向の工業化計画に沿って外資を誘致するためのものでした。免税輸出加工区は、当時は比較的新しいものだったのです。それにより、通常の場合農地であった土地を、外国の投資家が既存の労働法や環境法に邪魔されることなく活動を行える工業団地のために確保することになります。アジアにおいてこのスキームの先鞭を切り、成功させたのが韓国と台湾でした。輸出志向の工業化による両国の驚異的な成長が、マルコスに強い印象を与えたために、マルコスはその独裁的権力を使ってバターンの土地を没収し、マリベレス輸出加工区がすぐに活動を開始できるようにしたのです。

鶴見は加工区内の工場で働くため最初に雇われた労働者たち、そして突如多数の移住労働者の流入に直面しているこの田舎の町の住民たちにインタビューするため、バターンに赴きました。彼は輸出加工区というコンセプトが意味する経済的過程に関して、すでに独自のすぐれた知見を得ていました。というのも彼はこのコンセプトを、1970年代日本の拡張的資本主義を理解した者の視点から見ていたからです。

マリベレス輸出加工区から、鶴見は日本の製鉄会社による公害輸出に目を向けました。日本国内の環境基準が厳しくなって操業が難しくなった企業です。そうした例の一つが川崎製

鉄焼結プラントで、南フィリピン、カガヤン・デ・オロの PHIVIDEC 工業団地に進出先を見つけました。私たちは、フィリピンの長期的な工業化計画の一部として、この工業団地と重工業が位置づけられるということはすでに聞いていました。しかしこの、深刻な公害をもたらす日本企業がアジアに入ってくるもののコンテクストを私たちに示してくれたのは鶴見だったのです。彼は私たちに、日本の公害を長年研究し、川崎製鉄の工場がひとたび生産を開始したら排出されるであろう有害物質について熟知している日本人研究者たちを紹介してくれました。

「なるようになるさ」

初めて鶴見と共同研究を行ったのは 1980 年前後で、彼がミンダナオの第三世界研究チームに参加したときでした。彼はフィリピンで、誰がどんな状況でマグロを獲っており、それがどんな条件で日本に運ばれてくるのかを知りたいと考えていました。南コタバト州のジェネラル・サントス市が、主要なマグロ漁港だと聞いて、そこに行きたがっていたのです。その準備のため、彼はミンダナオについてありとあらゆるものを読んでいました。そのときの訪問はとても短いものでした。鶴見はミンダナオに関する本を大量に日本に持ち帰り、私の見る限りでは、彼はこの豊かで問題を抱えた島に取りつかれてしまったようでした。ある時点では、鶴見はスペイン入植前に、これらの島々、そしてボルネオやスマトラの島々を行き来するのに使われていた船について調べていました。

彼は見る間にミンダナオの専門家になりました。そして最終的に彼が研究対象として選んだのは、マグロではなく、ダバオとジェネラル・サントスのバナナ農園だったのです。マニラに戻ってくる前に、彼は日本で、バナナのための市場の構造を調査するチームを立ち上げました。そこでは商社から卸売業者へ、そしてそこから小売り業者へとつながる接点の部分にフォーカスしたのです。私たちの側でも、ミンダナオのバナナ生産がどう組織化されているかを調べるグループを立ち上げました。ここでは、生産過程全体において、小規模農家から多国籍企業までを結びつける生産関係にとくに注目するようにしたのです。鶴見が 1981 年にミンダナオで私たちのグループに合流したとき、夕食後の会話は、それぞれの調査結果を報告し合う共同セミナーのようになりました。

彼が研究者としてどのように仕事を進めるかを、私は間近に見ることができました。鶴見はエスノグラフィーの厳密な方法を身につけ、文献カードの山を築き、倦むことなくこまかな日誌をつけ続けました。これらのノートに彼は読んだ本のタイトルを書きつけ、地図をスケッチし、コンタクトすべき人々の名前、住所や電話番号をメモしました。彼は少なくとも 3 台のカメラを携行していました。一台は白黒、一台はカラー、そして一台はスライド用です。それに加えて、彼は小さなポケット・オリンパスを一台持っていて、手早くスナップ写真を撮るときに使っていました。

ミンダナオのジェネラル・サントス市で、ある冷え込んだ朝に、鶴見は漁港に写真を撮りにいくから、一緒に来ないかと私をさそいました。鶴見はいつものようにサンダルとジーンズ、何本ものフィルムといろいろな長さのレンズを詰め込んだカメラマンベストといういでたちです。鶴見は事前に、何時にマグロを積んだ船が港に入ってくるかを確認してあり、この巨大な魚が地元漁師にかつがれて運ばれるところを写真に撮りたいと考えていたのです。そのとき、鶴見はマグロのことも忘れていなかったのだと思い至りました。すでにバナナの研究で忙しくなっている、マグロのことも気にかけていたのです。どんな場所も、多様な研究の機会を提供してくれるということ。これも私が彼から学んだことの一つです。研究者の目は、ある時点で研究していること以外のトピックにも、つねに開かれていなければなりません。ある場所での出会いや友情については、どんなときでもきちんと記録しておかなければなりません。いつか同じ場所に戻ってくることもあるかもしれないからです。

鶴見のモットーは、「ケ・セラ・セラ *Que sera, sera*」でした。「なるようになる」ということです。彼にとって研究もまさにそうしたものでした。それは始まりも終わりも決して正確に予期したり計画したりすることのできない純粋な冒険であり、終わりのない過程なのです。それに対して、私自身の研究スタイルは、研究のあらゆる側面について入念に計画を立て、主たる問題に的を絞り、ほとんど脱線を許さないものでした。私にとって研究とは、あらかじめ定めたやり方で完結されなければならない機能的な課題 **functional task** なのです。鶴見にとってフィールドワークは、彼を見知らぬ世界へと誘う旅であり、それは予期せぬ発見に満ちたものでした。彼は私によく言ったものです。物ごとがどう展開していくか、最初からわかっていることなんて何もない。私たちが何も起こっていないと思っているときでも、何か必ず起こっている。私たちが幸運であれば、起こっていることの意味をすぐに見てとることができる。そうでなければ、何が起こっているのかわかるまで、しばらく時間がかかる。だからとにかく、辛抱強くなければならない。鶴見は考え深げに、そう語ったものでした。

私は、私たちがバナナに関する研究を終えた翌年、鶴見の辛抱強さを目の当たりにしました。国連大学のプロジェクトで東南アジアを旅しているとき、シンガポールのホテル内にあるコーヒーショップの静かな一角で、鶴見に出くわしたのです。彼はいつもの通り、ビールを飲み、タバコをふかしながら何かを書いていました。鶴見いわく、彼自身にもよくわからない事情で、マレーシアへの入国を拒否されたのだと。ある国家からはじき出されたばかりの人間にしては、彼は完全に落ち着き払って見えました。私がインドネシアに向かう途中だと知ると、彼は「一緒に行ってもいいかな？」と聞いたのです。

その時点で鶴見はインドネシアのことはあまりよく知らず、東南アジア勉強会時代の古い知人で有名人となっている人物を知ってはいましたが、地域の研究者コミュニティとはコンタクトもなく、インドネシアで何を研究するのか、というプランもありませんでした。一方、私の旅の目的は、定期的集まって東南アジア諸国の経済、政治、社会運動について議論し、発信するための、東南アジアの研究者と市民活動家のグループを立ち上げることでした。この旅で鶴見と私は、ジャカルタ、ジョグジャカルタ、サラティガ、そしてバリを訪ねました。鶴見は費用は自腹で、私の旅の道連れとなったのです。その途上で、鶴見はナマコのことをよく知っている地域の運動家や NGO のメンバーと彼をつないでくれる人々に会いました。ちょっとした調査で、セレベスの南西端にある漁港、ウジュン・パンダンを訪れることになり、それが鶴見の次の研究テーマとなったのです。

人々に根差した研究を

鶴見のトピックはどれも、初めのうちはこれといって議論の対象となるものとも思えず、計画的にも見えないのですが、あとになって私は、彼の研究がすべて一つの明確な視座に貫かれていることに気づきました。すでに申し上げた通り、彼は日本人の暮らし方と、それを支える経済が、東南アジアの人々の生き方に影響を与えている、そのありようにこだわっていました。ほとんどの日本人は、食卓に載せるバナナがどこから来るのか、誰がそれを育てているのか、そして何より、バナナを栽培する農民がどんなふうにいるのかを知らないのだと、彼はよく言っていました。そしてそれは普通の日本人が日々の暮らしの中で消費するマグロ、ナマコ、その他ありとあらゆるものについてもそうなのだ、とも、鶴見は言っていました。彼の目指していることは、現代日本が、他国の見知らぬ地域の人々の生活の犠牲のもとに、いかにしてその生活様式を維持しているかを明らかにすることなのだと言うことが私にははっきりと見えてきました。そしてそうした情報が、日本人に生活を見直し、変えさせることを、彼は願っていたのです。

大学に所属する研究者と異なり、鶴見は理論的含意、あるいは政策的含意を研究から引き出すことには関心がありませんでした。彼の目的は、普通の人々—学生、労働者、主婦やサラリーマンなど—の意識や思考の幅を広げることでした。彼は研究の成果を、一般的な読者にも容易に理解できるような言葉で伝えることを心がけていました。学会で報告することや、研究歴を積み上げることにも興味がありませんでした。彼の書く本が、あまり学術的なものと取られなくても気にせず、町で出会う平均的な人でも読めるスタイルで書きました。彼の目的はふつうの人に理解してもらうことであり、学会の教授陣や理論家からなるエリート集団に認められることではなかったのです。

東南アジアに関する彼の研究は質が高く、幅広いものでした。しかしあとになって、日本の学界で彼の業績が認められるまでには時間がかかり、しかもその評価は不十分であったことを知りました。私が出会った日本人大学教授の多くは、鶴見の著作を通して彼を知ってはいました。しかし彼らは、鶴見のことを多様なテーマについて長い報告を書く左翼のジャーナリストだと考えていたのです。彼らの多くは、この一匹狼の研究者が残した業績が示す見識の高さ、そして豊かさにただ嫉妬していたのではないかと私は疑っています。

研究テーマや調査資料を用心深く隠しておくような人たちと違い、鶴見良行はアイデアや調査結果についてオープンに語り、自分でも研究をしようとしている市井の労働者や主婦たちのために惜しみなく時間をさきました。龍谷大学での教授職を得たのは人生の後半になってからですが、彼と研究をともにした若い学生や主婦たちにとって、彼は大学教授の真髄といえる働きをしたと思います。鶴見はこうした人たちの研究を導き、アジアの友人たちに紹介し、研究に役立つ情報を提供しました。多くの日本人研究者が今も彼のことを記憶にとどめ、尊敬していること、そして人々に根差した研究という彼のビジョンを受け継いでいることは、驚くにあたりません。鶴見とつながる人々に対しては、いまでも東南アジアではたくさんの方々が即座に開かれるのです。

おわりに

私はずっと、鶴見は何より、現代日本の生活様式に関する、鋭い観察者であり批判者であると信じてきました。南アジアの現実に関する彼の著作は、読者、とくに日本の若者にとって、ある種の鏡として作用し、彼らが自分自身を見つめ直すことができるようにすることを意図したものだったと思います。

バナナであれ、ナマコであれ、マングローブであれ、輸出加工区であれ、彼は研究においてひとつの方法論と視座を貫き通します。ある時点で彼が検討している製品やシステムについての詳細な記述の下には、日本の資本が見せる侵略的な衝動と、それを支える排外主義的伝統への非常に巧みな攻撃が隠されています。私は鶴見の学生となる幸運には恵まれませんでした。しかし今になってみると、私自身の知的な歩みに、鶴見がどれほど影響を与えていたかがわかります。

フィールドワークへの比類ない情熱。データのチェック、ダブルチェックの入念さ。そして世界中の友人に、鶴見にとっては必要だが誰一人知らないような文献のコピーを送れと頼む—私が最もよく覚えているのは、そんな鶴見です。どこに行っても、鶴見は珍しい参考文献を探して、図書館や書店で長い時間を過ごしました。どこに行っても、地元の人が書いた本をたくさん買いました。おもしろい、価値がある、と思ったものは日本語に翻訳して、他の人にも読めるようにしました。鶴見の手元には、東南アジアに関する文献の個人コレクションとしては最良のものがそろっていたのではないかと私は思います。

何より鶴見は文章がうまかった。彼の文章はいつでも、人々の暮らしをわかりやすく語るものでした。彼の書くものが、多くの研究論文のように無味乾燥で知ったかぶりなものだったことはありません。研究者も、素人も、鶴見の本を難なく理解することができました。

なぜなら鶴見が文章に心を込めたからです。彼は社会に関わる研究者（engaged scholar）であり、象牙の塔にこもる知識人ではありませんでした。

すべてのよいエスノグラファーと同じく、鶴見はすぐれた旅行者でした。彼は泊まる場所や食べ物のことを心配したことはありません。病気になることをおそれたり、夜寝る場所が見つからないかもしれないと心配したこともありません。ミンダナオで最も危険な場所をうろつくときでも、身の安全を気にしたことはありません。一見すると自信とも見えるこうした態度の背後には、鶴見の、ふつうの人々への信頼がありました。

日本の思い出の中で、私がもっとも大切に思っているのは、やはり鶴見とともに過ごしたときのものです。彼はこの複雑な国を私に解きあかし、優れたところも、弱いところも、こだわりも盲点も示してくれました。彼はあらゆる点で日本人でしたが、自分の国に対してアウトサイダー—日本という母国と日本人を、批判的な目で見ることのできるコスモポリタンな観察者—であるようにも見えました。彼は確かに、一つの国に属するのではなく、人類全体に所属するすぐれた学者であり、知識人であったのです。

1990年代初頭、私が最後に鶴見に会ったとき、彼はすでにガンに侵され状態も悪かったのですが、京都の龍谷大学で正規の教員として教鞭を執っていました。彼は大学教授になったのです。それと対照的に、その頃までには私は、どちらかといえば大学教授と言うよりはメディアの人間、テレビのコメンテーターになっていました。そのとき私は、私がどれほど忠実に鶴見の信ずるところに従ってきたか、に気づいたのです。その信念とは、知識が社会に影響を与えるためには、知識は学問の世界の狭い境界線の内部にとどまっていたはならず、ふつうの人々と共有され、そのことによって人々の批判的な内省、解放、そしてエンパワメントの基礎にならなければならない、ということです。

このように個人的なことばかりお話してしまったことに、ここでお詫びを申し上げます。このすばらしい人物との代えがたい出会いについて、思い出さずにはいられなかったのです。立教大学は、鶴見のユニークな知的な旅の途上でたくわえた様々な文書に落ち着き先を提供することで、彼の功績への敬意を表明しました。彼の資料を「鶴見良行文庫」として保存するという着想は、彼の死後立ち上げられた小さな委員会で生まれたと聞いています。その委員会は、鶴見千代子さん、中村尚司さん、亡くなられた吉川勇一さん、藤林泰さんなどいずれも鶴見の友人で、文庫の散逸を防ぐため基金を用意されました。この「文庫」、少数の、おそらく生前の鶴見には会ったことのない人々によって大切に世話をされているこの「文庫」こそ、真の「アーカイブ」だといえるでしょう。

フランスの哲学者、ジャック・デリダは、「アーカイブ」という言葉の起源を二つの古代の意味に求めています。第一に、公的な文書の保管に責任を負っていた執政官「アルコン」の住む館、という意味。第二に、私的な領域から公的な領域へこれらの文書が移行していく際に、それを統合し、同定し、分類する「archontic」な機能、という意味です。文書は現代を生きる世代にアクセス可能な、現実に関連したものとして秩序立てられ、提示されなければ、それらは死んだ人間の知的道程のホコリにまみれた痕跡でしかなくなる危険があります。だからこそ、文庫が埼玉大学へ、そして埼玉大学から立教へと移管される中で、その管理に携わった人々の果たしてきた役割はじつに重要かつデリケートなものであったのです。鶴見の友人として、私はこのセンターでなされてきた骨の折れる仕事に感嘆するとともに、深い感謝の意を表したいと思います。鶴見が生前立教大学と何か関係があったのかについては私は存じませんが、これだけは申し上げることができます。あらゆる大学教授にとって、死ぬ前に自分の立教を見つけるのはひとつの夢である、と。

最後になりますが、鶴見良行の膨大な仕事は、生前は、学問の世界でそう熱烈に受け入れられたというわけでもありません。にもかかわらず、この場においてのみなさんは彼の業績の重要性を認めておられる。そのことに敬意を表したいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

-----oOo-----

[revised draft] June 24, 2015, Quezon City

randysdavid@gmail.com

translation by Izumi Hirano, July 23, 2015

=====

【質疑応答】

(質問内容は要約し、講演者の回答は講演録音の反訳をほぼ逐語的に日本語訳した)

質問：

鶴見さんに学生時代からお世話になっていたが、今日は二つほど新しい発見があってよかった。まず、バナナの前にマグロの研究をしようと考えていたこと。もう一つは、鶴見さんがマレーシアに入れなかった話は何度も聞いていたが、そのあとランディといっしょにインドネシアをぶらついているときにウジュン・パンダンを知ったということだ。そこで意見を聞きたいのだが、なぜ鶴見はマグロではなくバナナ研究に向かったのか。これはいくつか大切なポイントがあると思うが、先生の個人的な考えを聞かせてほしい。

David：

正直よくわかりません。思うのは、刺身や寿司はバナナと同じくらい、日本人になじみのあるものですが、バナナが植えられ、手入れされる状況が.....じつは今日のお話で、飛ばしてしまった部分があります。それは、フィールドでの日々、鶴見がバナナ農家が自分の子どもよりもバナナの世話をよくしているのを見て、鶴見がどう反応したかについてお話ししようと思っていた部分でした。

子どもたちは殺虫剤や人工の化学肥料の有害な影響にさらされ、バナナにつく虫を殺すために飛行機から散布される農薬にもさらされています。子どもたちも、農民たちもまったく無防備です。でもマグロは野生状態から獲られてくるだけなので、そういうことはありません。しかしバナナに関しては全てがあまりにも意図的であり、そのことが鶴見にショックを与えた。その様子を私自身、この目で見たのです。例えば、あるミンダナオのバナナ農家がある夜、彼に尋ねました。「実がつく直前に、日本の企業がバナナを切り倒せと命じてることがある。それがどうしてなのか、説明してくれないだろうか？何か月もバナナを世話したあとになって、そのバナナを切り倒せばお金をくれるというのだが、なぜそんなことを言うのだろうか？」鶴見はすぐに答えることはできなかつたのですが、日本に戻ってから調べました。日本の流通業者が、価格を調整し、高い価格を維持するために、ミンダナオで収穫前のバナナを切り倒すよう命じていたのです。これはほんとうにひどいことです。というのも一鶴見自身がそのように表現したのを私は覚えているのですが—これは人間の労働を殺すことだからです。日本市場での価格を維持するためだけに、人間の労働を無駄にしているとい

うことだからです。バナナ生産にまつわるシステムの全体が、マグロの収穫にまつわるシステムよりもはるかにひどい、恥ずべき体系となっていること。鶴見がバナナを選んだ理由はたぶんそれではないかと思います。

彼がマレーシアへの入国を拒否された件について、一言付け加えさせてください。このことには彼も驚いていたようです。鶴見はそれ以前にもマレーシアを訪れていましたし、実は私たちは一緒にマレーシアを旅したのです。この入国拒否は彼にとってとても皮肉なことでした。私たちがともにマラッカを旅していたとき、鶴見は私に、彼の父親は日本占領時代にマラッカとシンガポールの総督だったと話してくれました。それが今、独立した自由なマレーシアが彼を追い出している。これは彼にとってとても皮肉なことでしたが、あまり悪い気分でもなかったようです。

質問：

ロヒンギャのボートピープルの問題について、フィリピンのほうが日本よりずっと影響があると思うが、この問題についてどう考えるか。

David：

ありがとうございます。この件については私も書いたことがあります。

日本だけでなく、インドネシア、台湾、マレーシア、そして他の ASEAN 諸国も、ロヒンギャに居場所を提供していません。でもフィリピンは、「どうぞフィリピンにいらっしゃい」と言ったのです。フィリピン政府がなぜそんなことを言ったのか私にはわかりませんが、私にとってはうれしい驚きでした。そしてフィリピン政府のロヒンギャ歓迎の態度により、インドネシア、マレーシア、タイの政府もロヒンギャに対する方針を変更して、1年という期限付きではありますが、ロヒンギャの人々を受け入れています。

フィリピンは貧しい国ですが、70年にはベトナム人を受け入れて、再定住までバターンとパラワンに家を提供して支援しました。戦争中には、ロシアからの難民、ロシア系ユダヤ人、それからイスラエルのユダヤ人を受け入れました。フィリピンは全世界の難民に対してつねに人道的な態度をとってきたのです。それがどこからくるものか、正直なところ私にはわかりませんが、フィリピンがその貧困にもかかわらず、自らの国を追われた人々を受け入れていることを非常にうれしく思います。それはフィリピン人の真情から来ているようにも思います。というのもごくふつうのフィリピン人でも、外国人の受け入れ、とくに家を持たない人々の受け入れに抵抗を示すことはないからです。しかし、私たちは非常に貧しい国でもある。フィリピン人である私が言うのはどうかとは思いますが、これは称賛に値することなのではないかと思います。

フィリピンがロヒンギャを受け入れるのは、彼らの暮らす地域から遠いからではないかと言う人もいます。確かに私たちは、地図を見ていただければわかると思いますが、アンダマン海があって、マラッカ海峡があって、台湾、マレーシア—その向こうですから、ほんとうに反対側です。確かに遠いですが、それでも私たちは、自国であるビルマから排除されたロヒンギャの人々を受け入れる用意がある、と言えた。だからこそフィリピン人は、コリー・

アキノのビルマ版として支援もしていたアウン・サン・スー・チーが、ロヒンギャの問題について立場を鮮明にせず、傍観していることに不満を感じています。ロヒンギャの人々はいかなる意味でもビルマの市民権を認められてしかるべきですが、ビルマ政府は彼らはビルマ人ではなく、バングラデシュ人だと言う。しかしバングラデシュ政府もまた、彼らを自国民と認めず、居場所を与えないのです。その意味で彼らは国家なき人々であり、そうした彼らにフィリピンは「私たちの国にいらっしやい」と言ったのです。そして政府がそういう態度をとったことについて、文句を言っているフィリピン人は、私の知る限りでは一人もいません。

質問：

自分よりも貧しい人に出会ったときに援助と言う形で関わるのではなく、その人と自分との関係を見直し、自己批判をして自分を変えていくという形で他人と関わるということの大切さは、自分も鶴見さんや村井さんを通じて学んだことだ。しかしながらこれは自分自身の行動変容をせまるので非常に難しく、学生は頭でわかっても、それを次からの行動に移すことがあまりなく、そういう意味で限界を感じている。先生はそれでも、これがやはり有効だと思われるか。

もう一つは、ミンダナオに関しては、日本とミンダナオの不平等な関係性を問うことも大事だが、先生がおっしゃったとおり、現在バンサモロ基本法案が厳しい状況で審議されていて、マニラとミンダナオの関係というのもやはり問われる必要があると思う。果たしてマニラの人々はミンダナオを鏡として自分のことを見る可能性があるのだろうか。

David：

二つのとても魅力的な質問をありがとうございます。どちらも難しいですが、まずミンダナオに関する方からお答えさせてください。

ミンダナオの問題はとても難しい問題です。それは歴史的な問題だからです。ミンダナオは、スペイン統治時代は別の国家でした。スペイン人がやってくる前は、フィリピンの他の地域よりもずっと進んだ政治的制度を有していました。スペインがやってきて、333年間植民地として統治していた間も、ミンダナオは分離した、別の領域として管理されていました。1899年にアメリカがやってきて、50年にわたりフィリピンを支配したときにも、ミンダナオはモロの地域として別にされていました。しかし第二次世界大戦後、1946年にアメリカ合衆国がフィリピン独立を認めたとき、アメリカは、ミンダナオを含むこの島嶼地域全体を、ミンダナオの人々に意見を聞くこともせず、フィリピン共和国に委譲したのです。ミンダナオのイスラム教徒は、このことを決して忘れませんでした。そしてそれこそが、現在私たちが直面しているあらゆる問題の根源にあります。フィリピン人はあまり古いことを覚えていません。スペイン時代のことも、アメリカ時代のことも、記憶していません。そのためミンダナオはずっとフィリピンの一部だったと思っています。ですから、フィリピン人はミンダナオのモロが、「自分たちはフィリピン人だ」と感じているとは限らない、ということが理解できないのです。

私自身もそのことでショックを受けたことがあります。フィリピン大学の学生だったとき、私はミスワリと同じ寮で暮らしていました。ミスワリこそ、私が生まれて初めて出会ったモロだったのです。私は、モロのことが怖かった。そんな私にミスワリは言ったのです。「私はモロだ。フィリピン人ではない」と。ショックでした。フィリピン人にとって、それを理解するのはとても難しいのです。だからこそフィリピン人は、モロには自らを統治する権利はない、それが自治というシステムのもとであってもそうした権利はないと思いがちなのです。ですから私は、バンサモロ基本法については非常に悲観的です。あの法律が議会を通るとは思えません。議員はほとんど全員、非常に偏見を持っています。ミンダナオのイスラム教徒に対する彼らの差別意識は、驚くべきものです。基本法は成立しないでしょう。私が恐れているのは、法案が否決された瞬間から、あらたな戦争が始まるのではないかということです。

二つ目の質問はとても興味深いものです。というのもそれが、私たちが鶴見のもとへ連れ戻すものだからです。ご質問は、私の理解した限りでは次のようなものでした。「自らの著作や研究により、人々の生き方を変えることができると考えたとき、鶴見は現実的だったのか?」「人々を知識によってエンパワーすることができ、その知識が人々によって社会を変えるために使われると信じた、その点において鶴見は現実的だったのか?」

これは非常に重要な質問です。というのも私自身のような、大学に籍を置く研究者が研究をするとき、まあフィールドにいき、調査をし、論文を一本か本を一冊書いて、大学が昇進させてくれれば、それで終わりです。書いた本は図書館に収蔵されて、それで終わりです。それを読む人は大した数ではない、そうですね?

でも鶴見の研究スタイルは全く異なります。彼は研究に取り組み、それを楽しむのです。大学教授に昇進するとか、終身在任権を得るとか、そんなことは全く考えていません。そして彼は、誰にでもわかるように、非常に一般向けの書き方をします。人々はどこからマグロがやってきて、バナナがどのように栽培されて、ナマコがどんなふうに漁られているか、マングローブに何が起きているかを、人々は理解できると鶴見は考えていました。そして人々がそうした知識を、自らが搾取のシステムに参加していることを考え直すために使うだろうと考えていた。

では、そんなやり方で社会を変えることができるのでしょうか。確かにシステムと闘うのはたいへん難しいことです。しかし自分の消費のし方を変えることは可能です。日本の政治経済を丸ごと変革するのは無理でしょう。でもバナナを買うのをやめることはできます。もし週に7本バナナを消費しているなら、週1本でも十分かもしれません。病院へのお見舞いにバナナを持って行くかわりに、他のものを持って行くこともできるでしょう。鶴見はとても大事なことに気づいていたのに、私たちがそれに気づくまでに時間がかかったのではないかと思います。それは、どんなことでしょうか。

社会を変えたいと思ったら、その社会のありとあらゆる人々の意識に、必ずしも議会を占拠したり、社会全体に革命を起したりしなくても、何かはできるという思いを植え付けなければならないということです。革命はとても難しいし、革命の前に人々はおじけづいてしまいます。でも人々は自らの生き方を変えることで、最終的には社会全体を変えるために何か

をすることになる。鶴見はそれを信じていて、成功もしたのだと私は考えています。私たちの本のことを考えてみてください。鶴見も私も同じことについて、バナナについて書きました。さて、何人のフィリピン人が、私たちの本を読んだでしょう？500人でしょうか？それにひきかえ鶴見の『バナナと日本人』は再版もされ、50万部くらいは売れたのではないのでしょうか。そして『バナナと日本人』に書かれたことは、共生社会研究センターで今日見せてもらいましたが、中学や高校の教科書にも載っています。英語の教科書に、バナナを題材にした会話が載っているのです！

人々の意識に影響を与えるのはそうしたことで、それこそが社会を変える方法です。ゆっくりと、少しずつ。とうてい変えることのできないほど手ごわい社会全体を想像するのではなく、一人一人から始めること。システムを変えることはできなくても、自分から始めて、自分の生き方を変えることです。鶴見はそれを信じていたし、その点において彼は正しかった。私は私はそう思います。

Q&A transcribed and translated by Izumi Hirano on July 16, 2015.